

令和6年度 「豊かなむらづくり全国表彰事業」 東北ブロック受賞事例

農林水産大臣賞

(内閣総理大臣賞 受賞)

「人生100年時代」産直施設が高齢者の生きがいつくりと地域住民の交流拠点に

○団体名 なかどまりまのうさんぶつかこうはんばいしせつしゅつかしやきょうぎかい 中泊町農産物加工販売施設出荷者協議会 (会長 かいちよう 田中 たなか 恵津子 えつこ)○所在地 青森県 きたつがるくん 北津軽郡 なかどまりまち 中泊町

○むらづくりの背景・経緯

平成7年度に旧中里町が整備した中泊町特産物直売所「ピュア」(以下「直売所」という。)について、町が新たに農産物加工・販売施設を拡充するとともに、施設の指定管理者の公募を行い、地元企業の(株)アクトプランが直売所を運営することとなった。

また、地域の活性化につながる取組がしたいとの思いから、生産者は新たに中泊町農産物加工販売施設出荷者協議会(以下「協議会」という。)を立ち上げ、両者の目標等を話し合う中で相互補完し、連携・協働により取り組むこととなった。



中泊町特産物直売所「ピュア」のスタッフ

○むらづくりの内容

(1) 農業生産面

運転免許証を返納し出荷が困難な高齢の生産者を多く抱えていたこともあり、午後には直売所の品揃えが乏しく売り上げ減少の一因となっていた。このため、地区内に個別集荷場所を設置し、高齢の生産者からの集荷やコミュニティバスを活用した集荷体制を構築した。この取組等により直売所の品揃えが豊富になり、会員の年間販売額の増加につながっている。



個別集荷場所での集荷

また、協議会の会員の約9割は女性で構成されており、女性の協議会会長と直売所店長が中心となり、集荷体制の強化や移動販売、朝市の開催など毎年新規事業を打ち出し、直売所の販売額は平成25年に比べ約2倍の約2億円に増加している。

(2) 生活・環境整備面

高齢者等の買物弱者対策が課題となっていたことから、商工会、大学等と連携した商品配達サービス「ピュア宅配事業」や旧小泊村での移動販売に取り組み、利用客が商品の搬入を手伝う等、利用客同士や直売所スタッフとの交流と、お互いの顔が見える関係をつくることで、高齢者の見守り活動につながっている。

また、津軽地域の郷土料理を継承するため「津軽の食文化伝承手づくり体験」を開催するほか、みそ及び豆腐の製作キットを直売所で販売し、食文化の継承の取組を行っている。



利用客が商品を搬入



移動販売に大勢の利用客

令和6年度 「豊かなむらづくり全国表彰事業」東北ブロック受賞事例

農林水産大臣賞

若い担い手が集い、生涯現役の住民たちと共に
山間部の農地・林地を守り継ぐ

○団体名 向黒沢集落 (自治会長 浅村 廣美)

○所在地 秋田県 北秋田市

○むらづくりの背景・経緯

向黒沢集落では、農業離れや兼業化が進み、少子高齢化等で住民同士の交流が希薄化するなど、集落機能の維持が困難になりつつあった。こうした地域課題の解決と営農の存続を図るため、「向黒沢生産組合」を設立後、「農事組合法人向黒沢ファーム」(以下「法人」という。)として法人化し、山間部の農地・林地を守っている。

集落の活動は、自治会を中心に、法人と多面的機能支払の組織「向黒沢地区資源保全会」が連携して行っている。



向黒沢集落の皆さん

○むらづくりの内容

(1) 農業生産面

法人設立を契機に集落では、農地の集積・集約化や園芸作物の生産等に積極的に取り組み、魅力ある複合経営を実践している。

また、若い担い手を確保するため幅広く募集を行い、平成25年から5年間で市内の農業高校から3名、障がい者養護施設から1名を新たに雇用している。4名は法人の中核を担う人材として生産現場で活躍しており、自治会や資源保全の各種活動にも積極的に参加するなど、集落全体の維持発展にも貢献している。



法人の中核となっている若い担い手

(2) 生活・環境整備面

クマの出没や農作物被害の増加に対応するため、自治会が主体となり、法人等と連携しながら、農地周辺の草刈り作業や森林内の枝打ち作業等を行っている。また、クマ対策に係る学習会を開催し、県の専門家やマタギと意見交換等を実施しているほか、クマ対策の活動をまとめた広報誌を作成し、周辺集落に配布するなど、広域的な取組へと発展させている。

法人主体で実施している「ねぎ穫り放題」のイベントは、1日で数百名が訪れるほどのにぎわいで、集落総出で対応しており、新たなコミュニケーションの場となっている。



クマ対策のための農地等の周辺整備

令和6年度 「豊かなむらづくり全国表彰事業」東北ブロック受賞事例

農林水産大臣賞

賑やかな田舎づくりに挑戦！～地域資源を活かし集落活性化～

○団体名 清流と山菜の里ほその村（代表 五十嵐 幸一）

○所在地 山形県 尾花沢市

○むらづくりの背景・経緯

少子高齢化・過疎化の進行により、共同作業や季節行事、文化や伝統技能の伝承が困難となり、集落機能の低下や担い手不足による耕作放棄地の増加が危惧される中、本会の代表が定年退職を機に集落に恩返しをしないと、同年代の仲間と地域を見直す活動を始めた。

県内外の先進事例視察等を行い、集落の自然・文化・歴史・景観等を活用して、都市と農村との交流や地域資源の有効活用を図り、集落の活性化のため、10年20年先を見据えた地域づくりを目指し、話し合いの場づくり、何事にもチャレンジする、地域資源を活用した雇用創出、少子高齢化対策などを目標に、地域内全戸が参加する「清流と山菜の里ほその村」を設立した。

集落の30名の役員で毎月定例会を開催し、地域課題の共有、解決方法の検討等を話し合いながら取り組んでいる。



農家レストランの運営を担う友輪会メンバー

○むらづくりの内容

（1）農業生産面

集落の景観保全と荒廃農地抑制のためそば栽培に取り組んでおり、生産されたそばは、集落内の農家レストランや新そばまつりに提供されている。また、集落の高台に観光わらび園を造成し、県外からの来訪者も多い。

集落にはイタヤカエデが多く自生しており、採取した樹液を煮詰めたメイプルシロップと地元細野産ホップを使ったクラフトビールを商品化し、市内の道の駅やほその村での販売を行っている。



観光わらび園

（2）生活・環境整備面

地域内の女性による「友輪会」を組織し、空き家の作業小屋を改修して農産物加工品の製造・販売や農家レストランでの料理の提供を行っており、友輪会の活動を楽しみにしている会員が多く、女性の活性化につながる取組となっている。

地域の魅力や資源を住民自らが発見し、これら資源を地域内外との交流事業に活用する等、農家レストランを核に継続した取組につながっている。



農家レストランでのイベント

令和6年度 「豊かなむらづくり全国表彰事業」東北ブロック受賞事例

東北農政局長賞

「結」の心で地域と子ども、そして未来を紡ぐ

○団体名 のうじくみあいほうじんいっかたい ちくえいのうくみあい だいひょうりじ みうら たけし 農事組合法人一方井地区営農組合（代表理事 三浦 武志）

○所在地 岩手県 いわてけん 岩手郡 いわてまち 岩手町

○むらづくりの背景・経緯

一方井地区は、水稲以外の作物を経営の柱とする農家が増加し、水田を活用した園芸作物の割合が徐々に増加するようになってきた。一方、高齢化や水稲と園芸作物の労力競合による労働力不足から不作付地が地区全体の3分の2を占めるようになり、耕作放棄地となることが懸念されたことから、農地を有効活用した効率的な営農を目指し、集落の主要メンバーを中心にむらづくりの話し合いを行い、平成19年に「一方井農業機械利用組合」と「一方井地区営農組合」を合併し、「農事組合法人一方井地区営農組合」（以下「営農組合」という。）を設立し、農地の一元的な管理や機械の共同利用等を行うこととなった。



地区内で製作している田んぼアート

○むらづくりの内容

（1）農業生産面

営農組合では、農地の利用権設定や農作業受託を進め、地区内の水田の15.5ha（地区内の水田の約9割）と地区外の農地24.5haを合わせた40haの農地で、水稲や大豆、飼料用米等を栽培しているほか、りんどうや薬用作物等も導入し、収益向上に努めている。

営農の基幹的な作業（耕起、田植え、稲刈り等）は、営農組合の6名のオペレーターが引き受け、ほ場の生産管理作業は、農地所有者が行うことで構成員全員が活動に関わっている。

営農組合の女性部は、オペレーター作業の補助やりんどう栽培、ほ場の除草や収穫、出荷調製などの細やかな作業を行っているほか、小学校の農作業体験の講師として子供たちと一緒に作業を行っており、収穫後の昼食会での調理のほか、納豆・豆腐作りの加工指導を行う等農作業以外でも交流を図っている。

（2）生活・環境整備面

自治振興会や土地改良区と連携した多面的機能支払交付金の取組を通じて、非農家も含めた地域住民と地域の景観形成に取り組んでいる。また、隣接する浮島地区営農組合等と田んぼアート制作の実行委員会を組織し、デザインは子供たちから募集を行い、は種から田植え、収穫までを農作業体験と合わせて取り組んでおり、完成した田んぼアートには多くの来訪者でにぎわいを見せており、地区内の学校との交流を通じて食の大切さを伝える取り組みにつながっている。



小学生による豆腐作り体験



景観形成活動

令和6年度 「豊かなむらづくり全国表彰事業」東北ブロック受賞事例

東北農政局長賞

～持続可能な農村産業の構築よそ者、若者、「高齢者」が地域を救う～

○団体名 ゆうげんがいしゃいずぬまのうさん だいひょうとりしまりやくかいちょう 有限会社伊豆沼農産（代表取締役会長 いとう ひでお 伊藤 秀雄）

○所在地 宮城県 とめし 登米市

○むらづくりの背景・経緯

昭和63年に創業した「有限会社伊豆沼農産」は、平成元年に法人化し、米・豚の生産に加え食肉加工、地域農産物の販売からレストラン事業等、6次産業化に取り組んでいる。法人を通じて様々な事業に取り組んでおり、地域住民と共に農村の「場」で生産した「もの」と、農村で暮らす人たちの「こころ」を組み合わせ、物語性豊かな商品とサービスを提供する「農村産業」の構築に取り組んでいる。

○むらづくりの内容

（1）農業生産面

平成12年に地域の農業者に声がけし「伊豆沼農産直売会」を立ち上げ、現在89名の会員が直売所「くんぺる」に農産物を提供しており、地域農業者の所得向上に貢献するとともに、レストラン体験施設等を拡大し、都市住民等との交流にも取り組んでいる。



直売所「くんぺる」

（2）生活・環境整備面

法人がある新田地区周辺の豊かな資源を調査研究し、新たな価値を創造するための事業や地域の環境保全、子供の健全育成等の事業を行い、地域に住むすべての人が自信と誇りをもって地域づくりを進めるため「新田あるものさがしの会」を設立し、多くの地域住民が参加し話し合う「しゃべり場倶楽部」は、これまで120回を超える取組となっている。



新田食の文化祭

また、法人を事務局に、地域コミュニティー推進協議会や土地改良区、商店会等で組織している「新田地区活性化協議会」では、地域の家庭料理を一堂に集めた「新田食の文化祭」を開催し、各家庭に伝わる料理をレシピ本にまとめ紹介している。レシピ本に紹介されたメニューは、民家の軒先で休憩しレシピ本の料理が味わえる体験ツアー「風土フットパス」に組み込み、地域外の住民との交流と農村の再発見の場として活用されており、農業生産だけでなく地域の文化・伝承を含め、地域資源を活用した交流人口拡大につながる取組が行われている。



体験ツアー「風土フットパス」

東北農政局長賞

未来に咲かす子どもたちの笑顔
～根っこを担うおおたま村づくり(株)の挑戦と責任～

○団体名 おおたま村づくり株式会社（代表取締役 鈴木 誠一）

○所在地 福島県 安達郡 大玉村

○むらづくりの背景・経緯

大玉村は、遊休農地や高齢化の問題が顕著になり、遊休農地の解消と高齢者の生きがいの創出を兼ねた野菜などの生産と、農産物の販売を行うための直売所を平成19年にオープンし、直売会会員数や売り上げを年々伸ばしていた。

その後、直売所に出荷される農産物の種類・量が増加したことで売り場が手狭になったことから、平成29年に村が新直売所の建設を行った。直売所の運営については、会員等が



村づくり株式会社のスタッフ

参加し設置した公設民営化検討委員会で、「村直営での運営では収益活動に限界がある」等の意見から、会員や村民が株主となり「おおたま村づくり株式会社」を設立し、村有施設の産業振興センター（あだたらの里直売所、お食事処たまちゃん、大玉ふれあい広場）及びアットホームおおたま（温泉宿泊保養施設）の管理運営を行うこととなった。

○むらづくりの内容

（1）農業生産面

直売所は、直売会会員の所得向上を目的に地元産品のPR、地産地消の推進、特産品開発など販売面から生産者を支えており、会員数は約260名で、女性が約8割を占めている。直売所のスタッフも女性が多く、女性視点で売り場づくりが行われている。

農産物に対する安心安全の意識向上のため、株式会社の社員がJGAP指導員の資格を取得し、生産者への指導・支援を行っており、また、4名の会員がJGAPの認証取得し「福、笑い」の栽培を行っている。認証農場で生産された米は、直売所で販売するとともに、食事処たまちゃんやアットホームおおたまで、直売会会員が生産する野菜等とともに提供している。

（2）生活・環境整備面

小中学校の農業体験や直売所での職場体験の受入れだけでなく、教員の研修も受入れており、生産者の視察・農業体験を通じて農業の現状や環境に関する取り組みなど、授業に活用できる内容とすることで、農業のやりがいや楽しさを伝えることにつながっている。

また、東京農業大学学生の農業体験の受入れなど、首都圏との交流人口を創出することが、未来の大玉村にかかわる人材を創り出す種まきと捉え、大学の調査研究や研修の受入れを積極的に行っている。



大学生の農業体験受入 中学生の直売所での体験